
千年のヒストライズ

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年のヒストライズ

【Nコード】

N0816Z

【作者名】

来戸 述

【あらすじ】

英雄に怯える赤毛の少年。自分を偽り続ける王女。己の力を試したい青年騎士。野望を胸に秘める海賊の男。悲しみから逃げる魔族の女性。それぞれの思いが千年の時を越え、ひとつの物語を紡いでいく。

く001く（前書き）

ファンタジー。とりあえずファンタジー。

なぜファンタジーなのか？　そこに幻想が広がっているからだ！
1日1ページの更新を目標に、力の続く限り頑張ります。

【1】

暖かなランプの光を受けて、少女の額で真つ赤なルビーがきらりと輝いた。

少女は化粧台に取り付けられた大きな鏡の前に立ち、目を細めてその輝きを見ていた。

いや、そうではない。少女の虚ろな目は、輝きを映し出す鏡を見ていた。

曇り一つない綺麗な鏡。こんな素晴らしいものをつくるのにいったい何人の職人がいったいどれだけの時間をかけて磨き上げたのだろう。そして、それにはいったいいくらのお金がかけられたのだろう。

わたしはそんなお金、少しも払ったことがないのに

少女は額に手をやると、ティアラの傾きを調整した。しっかりと自分を『飾らなければ』いけない。そう教えられて育った。たった今誰かの首筋を切り裂いて噴き出た鮮血のように紅い宝石を少女の細い指先がそつと撫でた。

こんなわたしでも、一所懸命に飾れば、価値が出てくるのかな
何度となく繰り返してきた疑問が、少女の脳裏をよぎる。

シエリア・ローズ・ブラッドリイ。それが少女の名前だった。

両親が占い師と相談してつけた名前。紅玉の国を象徴するに堪えられる立派な名前。だが、少女はその名前以上の価値を自分自身に見出せたためしなかった。

生まれてきて十六年と四ヶ月。少女は『シエリア・ローズ・ブラッドリイ』という名前の人形か、もしくは『シエリア姫』の値札がつけられた置物でしかなかったのだ。

「……うつん、違う」

少女は鏡の前で小さく頭を振った。

かつて一人だけいたではないか。自分のことをありのままに見てくれた人が。

自分と同じくらいの年頃。背丈。ルビーのように紅い髪の毛。宵闇の中で落とした一本の針を探すように、その人の顔を思い出そうとして。

「駄目ね、わたし……あの子の顔、忘れちゃった……」

おぼろげな記憶は、結局、おぼろげなままだった。

もう一度、あの子に会えば思い出せるかもしれない。でも、そのときわたしはいつたい何を話そうとするのだろう。

本当のわたしって何？

本当のわたしは何を考えて生きてきたの？

本当のわたしってきれいに見える？

本当のわたしじゃ駄目だったの？

鏡に向かってため息をつく。

「……もう、飽きちゃったよ」

少女は血の色をしたルビーを嵌め込んだティアラを外すと、化粧台の引き出しにしまった。

こんな無意味な問いかけを続けるのは、もう飽き飽きだ。
答えてくれる者など、誰もいないというのに。

「おやすみ、シェリア」

少女は鏡に映る自分に手を振ると、天蓋の付いたベッドへ歩いた。
わたしは今日も夢を見ることはないだろう。

鏡の中の『シェリア・ローズ・ブラッドリィ』が笑っていたから。
彼女が笑顔なら、鏡の外の自分が本当に笑える日はやって来ない
のだ。

それは決して諦めなどではなく、冷静な分析から導かれる現実
のものだった。

【2】

国境を流れる河を渡ると、見慣れた景色が目映った。

とはいえ、それは少年の記憶にある風景とはだいぶ変わっては
いたのだが。

「まあ、六年も経てば無理もないな……」

並んで歩く馬の手綱を引きながら、少年は独りごちた。

「ん？ 何か言ったか、アレク？」

馬上から少年に声がかかった。立派な毛並みの白馬に跨がってい
るのは、これまた立派な衣服に身を包んだ若者だ。降り積もった雪
のような見事な銀髪をしている。

馬上の若者とは対照的に、並んで歩く少年の髪は赤い色をしてい
た。紅白をめぐたい組み合わせとする風習は彼らがやって来た方向、
河よりも手前にのみある文化だ。河を渡ってしまえば、この奇妙な
頭髪の対比もさほど人の目を引くことはない。

「あ、いえ……僕がいたときと比べると、この辺りの様子もだいぶ
変わっていたので」

アレクと呼ばれた少年は正直に感じたことを答えた。頭上の若者に嘘が通じないことはよく知っている。

「まあそうだろうな。あれからもう何年だ？」

「六年だったと思います」

「嘘つけ。正確な年月も覚えてるだろ？」

「……六年と四ヶ月です」

この人にはかなわないな。とアレクは笑った。

まるで頭の中をすべて覗かれているかのような錯覚を覚えてしま
う。

「レオンハルト様は、どうしてこんな些細な嘘も見抜くことができ
るのですか？」

「コツがあるんだよ。ちょっとしたことだ」

「……………」

「知りたいか？」

「わかっていて訊いているのでしょ？」

レオンハルトと呼ばれた馬上の若者は大きな声で笑った。ひとしきり笑い、それからふと考えるように顎に手を当てた。

「教えてやってもいいが……その前に、お前のその『レオンハルト様』というのはどうにかならんのか？」

「騎士様のお名前に敬称をお付けするのは、小姓として当然のことかと」

「お前の場合、本心からそう思ってるから始末に負えないな。たいていの奴らは建前はともかく、本音じゃ俺のことは呼び捨てにしたがつてるのに」

「それはレオンハルト様がわれわれ下々の者とも親しくお話しくださるからです」

「いや、俺が言ってるのはもっと上のだな……」

レオンハルトは振り返ると、通ってきたばかりの街道を遠い目で見ながら言った。

「……まあ、あそこに戻ることももうないだろうからいいか」

悲しげで、それなのにどこか清々しさがある不思議な視線だった。

レオンハルトの目の奥にある複雑な感情を読み取って、アレクは遠慮がちに訊いた。

「国王様のご決定をお恨みになつているのですか？」

「まさか。逆だよ、逆。俺をあの狭っ苦しい国から叩き出してくれて感謝すらしている」

「この辺りで一番大きな国家を指して狭っ苦しいなどと……」

「狭いさ、あの国は。了見が狭い。あんなふうには俺はならない」

レオンハルトは頬を緩めると、アレクに向かって言った。

「悪かったな、俺に付き合わせて。俺にとっては見知らぬ国への大冒険だが、お前にとってはただの里帰りだ。と言っても、お前は故郷を飛び出たくてこっちに來たんだろ？」

「ええ、まあ……」

「嘘か本当かわかりづらい頷き方だな、それ」

「見分けるコツは何ですか？」

「ああ、そうか。そういえばそれを教えるんだったな」

レオンハルトは頭を掻くと、柔らかな表情になって言った。

「観察と推測。言うなれば洞察だな。それに尽きる」

「と言うと？」

「お前、さっき俺の目を見て、父上を恨んでるかどうかが訊いてきただろ？」

アレクはとつさに言葉を返すことができず、やや躊躇したあとでわずかに頷いた。

「なに、遠慮することはない。主の顔色をうかがうのは小姓として当然だ。そこは開き直ってくれてかまわない」

「す、すみません……」

「だから謝ることじゃないって。まあ、それはさておき、お前は俺が振り返って後ろを見る動きを観察して、俺が父上を恨んでいるんじゃないかと疑ったわけだ」

「ええと……はい、そうなりますね。たぶん」

「そこまではいい。だが、そこから先が駄目だ」

「そこから先？」

「人を観察しただけでわかることなんてたかが知れているというとき。大事なのはその先。自分が持っている情報を組み立てて、相手が何を考えているか推測することだ」

よくわからないといった様子のアレクに、レオンハルトはさらに説明を続けていく。

「俺があゝの国でどんな扱いを受け、どんな気持ちでいたか……それを考えれば、自ずと答えが出てくるというわけだ。生まれた国にこだわるより、この目でもっと広い世界を見てみたい。と、俺はそんな人間に育った。あゝの国でな。今の俺にはそういう考え方がない。そういう考え方ができない。俺が見聞きしたのとは違う、別の世界が見てみたいんだ……」

レオンハルトは相変わらず遠い目をして言った。だが今度はその視線は、これから向かうとしてゐる辺境の小国へと向けられていた。

紅玉の国？？それが彼らが向かう国の名だった。

それは見知らぬ国だった。少なくとも馬上のレオンハルトにとっては。

「お前、何か特別な日に故郷を出てきただろう？」

「えっ？」

唐突な問いかけに、思わずアレクは頭上を見上げた。

見上げた先に、レオンハルトのいたづらっぽい笑みがあつた。

「お前が藍玉の国に来たとき。いや、それからずっと一緒に過ごしてきたわかったことだが、どうもお前は思いきった決断というやつができない性格らしい。そんな奴が生まれ育った国を出て余所の国

に移り住むだなんて、よっぽどのがあつたに違いない。俺でさえ、父上に脅されるまでは決めかねていたんだからな。それなら、その一世一代の大決断の日を覚えていないわけがない。どうだ、理論的な推測だろう？」

「……恐れ入りました」

アレクは心の底から恐縮して頭を下げた。

「何があつたのか、それは訊かないのですか？」

「お前なら、自分が打ち明けたいときに言ってくれるだろうさ。無理に聞こうとは思わない」

理論的な推測だろ？　そしてレオンハルトは、もうこの話は終わりだと言わんばかりに、アレクから馬の手綱を奪った。上等な白馬が軽く嘶いた。

レオンハルトは自分で手綱を操りながらも、決して馬足を速めようとはしなかった。横に並んで歩くアレクの歩調に合わせ、巧みに手綱を捌いていった。

二人は石畳の敷き詰められた街道を歩いていった。まだ日は高く、今夜の宿を探す時間ではない。そのせいか二人とも歩みに余裕があった。

今後のことは、まだ何一つわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0816z/>

千年のヒストライズ

2011年12月5日20時47分発行